

日時：2016 年 5 月 17 日(火)

場所：総合研究棟 A 棟 618

インタビュアー：渡辺昇（西洋言語文化学 3 年）

インタビュイー：石野好一先生(西洋言語文化学プログラム教授)

石野先生の研究内容について

学生：本日はインタビューにご協力いただきありがとうございます。よろしくお願いします。まず、先生の研究内容について教えていただけますか。

石野先生：フランス語を中心にした言語学研究をしています。それを私はフランス言語学と呼んでいるのですが、フランス語を基にして言語について考えるみたいな感じです。フランス語に関して言えば意味論と語用論という分野があるんですけども、いろんな表現の意味とそれにまつわるニュアンスのようなことを考えたり、調べたりします。そういうことが研究の一番の中心になっていますね。例えば今フランス語で数字の 2 は、少ないことを表すことがあって、「ちょっと待って」を「2 秒待って」という風に言うんですね。また、たくさんということを表すときに 36 という数字を使って、「36 通りのやり方があります」って言うのと「いくらでもやり方がありますよ」という意味になるなど、数字にもいろんなニュアンスがあるんです。このようないろんな表現について意味とニュアンスについて考えたり、分析したりしていますね。

あとは、これも意味とニュアンスについてなんですけど、接続詞の意味や、接続表現や接続詞で文と文を繋ぐときにどういった言葉遣いをするのかなども扱っています。また、日本語とフランス語の全般的な比較とかもしています。このようにあまり狭く限定したくないので、かなり広くやっています。日本語の研究も多少は論文を書いたことがあります。興味が拡散していていろんなことに興味がありますね（笑）なので、論文はたくさん書いていますね。

学生：例えば、どういった論文を書かれるのですか？

石野：今言った内容の論文とか、類義語の意味の違いの論文を書いたり、漢字の論文についても書いたりしました。日本語の漢字って世界の言語の中でも、文字の中でも珍しいでしょ。中国語ともまた少し使い方が違いますね。だからわりと面白い研究材料になりますね。今度またそれについてここで発表しようと思っています。また、本とか教科書もたくさん書いています。

学生：そうなんですね！ありがとうございます。

先生の経歴について

学生：次に先生のご経歴について伺いたいと思います。

石野：大学は上智大学のフランス文学科で、大学院は言語学科を出ました。高校時代から外国語が好きで、スペイン語を勉強してましたが、大学受験時にスペイン語学科とフランス文学科を受けたら、たまたまフランス文学科に合格したので、フランス語を勉強することになって、大学院へは言語学がやりたくて、行きました。そのあとは、関西の大学に就職して、10年いました。そして、今度は今の首都大学東京に移って15年、その後愛知県立大学の外国語学部のフランス語専攻というところに移って、昨年まで9年いました。そしてこの4月から新潟大学に来ました、



新潟大学で担当されている講義について

学生：次に新潟大学で担当されている講義について伺います。

石野：まずは、1年生のフランス語の授業を担当しています。あとは、フランス語を中心にした言語文化論の講義で、1つはゼミ形式の演習で、「フランス語を知る 言葉を考える」というテーマで話をして学生と議論しています。もう一つは、これまで作った教科書、例えば「ニュアンス練習帳」という教科書を材料にして、具体的な意味とニュアンスについて、実際に解説して、使い方を学び、練習問題をやるような講義をやっています。あとは、言葉について書かれた面白い話とか、言葉と文化についてフランス人が書いたものをピックアップして、それを読んだりしていますね。

先生の学生時代について

石野：高校時代はスペイン語を勉強したり、友達とエスペラント語を勉強したりしていました。エスペラント語は人工語で、世界共通語を作ろうと考えて作られたのでわりと易しいんですよ。単純化してあってね。ただ単語がどうしてもヨーロッパの言葉をベースにしているからヨーロッパの人の方がやや有利なんですけどね。文法も非常に単純化してあって例外がなくて、男性形、女性形もなくて、形容詞はこういう語尾とか、名詞はこういう語尾とか、統一されているんですよ。だから勉強するのが非常に楽だと言われているんです。でもね、結局あんまりやらなかったですけどね（笑）かじっただけだったらくさんありますね。

学生：いろんな言語をやっていたのですか？

石野：はい。入門って書いてある本なんてすぐにつちやうんですよね。でもパラパラって見て、「良いやもう満足した」ってなるので、まともに話せないんだけどね。とりあえず覗くだけだったら、いろんな言語をやって来ました。高校時代からそういう感じでしたね。大学はフランス語専攻になったせいか、フランス語にかなり力を入れてやってたんで、もっぱらフランス語ばかりでしたね。また、フランス文学科が、フランス語劇を伝統的にやっていたので、そんなことをしたときもありました。上智大学は昔から外国語がわりと盛んな学校だったので、それもあって選んだんですけど、そういう意味では結構いろんな勉強ができました。学部の学生時代から大学院の勉強をしたり、言語学の勉強をしたりしましたね。まあ比較的真面目な学生時代でした（笑）

インタビューを終えて

学生時代からスペイン語やフランス語などの様々な言語に興味をお持ちで、言語を比較してみたいと思ったことが、今の仕事に繋がっているそうです。この仕事が楽しくて辞めたいと思ったことがないそうです。興味があること、やっていて楽しいことが将来の仕事になるかもしれません。